

[平成28年度 奨励賞]

郊外都市の豊かな暮らしと生活美学 —阪神間モダニズムをめぐって—

金河 梨花子

目次

はじめに

第1章 郊外都市の成立

1. 近代化による影響
2. 私鉄の開通と郊外居住の増加

第2章 郊外生活における余暇活動

1. 電鉄会社によるレジャー開発
2. 「住」と「遊」の近接

第3章 阪神間の文化的特徴

1. 消費活動にみる「私」の文化
2. 教育にみる美意識の重視

おわりに

はじめに

人口減少や財政難で地域間の格差が問題視されている昨今において、「憧れの街」「住みたい街」として根強い人気を誇る地域がある¹。大阪と神戸に挟まれた六甲山南麓に位置する、阪神間と呼ばれる地域である。具体的な行政区域としては、兵庫県宝塚市、西宮市、芦屋市、神戸市東部が含まれる²。六甲山系と瀬戸内海に囲まれ、気候・自然環境共に良好で、大阪都心部に近く、交通利便性が非常に高いのが特徴である。

この地域の魅力を高めている要因としては、良好な住環境、交通利便性に加え、生活を豊かにする様々な施設が身近に揃っていることが挙げられよう。レジャー施設、百貨店、大型ショッピングセンター、大学、文化・芸術施設等の種類や規模は、大阪都心部と比べても引けを取らない。この背景には、近代における阪神間の成り立ちが影響していると考えられる。

阪神間は、明治時代の鉄道の開通を機に、大阪・神戸の郊外住宅地として発展した。初期においては、大阪や神戸の有産階級の人々が豊かな自然環境に着目し、自宅や別荘を建てた。官営鉄道が敷かれた後、阪神・阪急という2つの私鉄が相次いで開通し、次第に郊外居住が増加していく。電鉄会社を中心となって沿線住宅地の開発が行われ、旅客収入の安定を図るため、百貨店・遊園地・ホテル等のレジャー事業も積極的に進められた。このような、暮らしに「豊かさ」を加える沿線開発によって、阪神間に独自の生活美学が醸成され、今日の地域の魅力に影響を及ぼしていると考えられる。ここでいう生活美学とは、「日

常生活に潤いや楽しみを取り入れる作法・術（すべ）」であり、人々は、多様な余暇の選択肢が用意された住環境の中で、積極的に私生活を楽しんできた。阪神間にとって近代とは、単に都市としての著しい発展を果たしただけでなく、人々のライフスタイルが大きく変化し、地域の魅力の特徴づける時代であった。

本稿のテーマである「阪神間モダニズム」とは、このような新時代のライフスタイルを築き上げてきた阪神間地域独自の文化である。明治末期から昭和初期にかけて、大阪上方の伝統文化と神戸の舶来文化が融合し、独特の文化が誕生した。伝統とモダンが同居した気風の中で、人々は豊かな暮らしを営み、独自の生活美学を育んできたと考えられる³。

本稿では、特に当時の市民の余暇活動に焦点を当てて、豊かな郊外生活の中で醸成されてきた生活美学について明らかにしたい。そして、自身の暮らす阪神間について理解をさらに深め、この地域の持つ魅力の再確認を行うことをねらいとしている。

まず、第1章では、国の近代化と私鉄の開通という2つの観点から、阪神間地域が郊外住宅地として発展を遂げてきた過程を明らかにする。続く第2章では、阪神電鉄・阪急電鉄によるレジャー開発の歴史について考察し、当時の人々が享受していた余暇活動の実態を解明する。そして第3章では、「私」「個人」を重視する阪神間の文化的特徴について述べ、豊かな郊外生活が展開されてきた要因について考察を加える。最後に、第1章から第3章までの考察を踏まえ、郊外都市の豊かな暮らしと生活美学が育まれてきた背景を明らかにし、今日の阪神間の魅力について論じたいと考える。

第1章 郊外都市の成立

1. 近代化による影響

阪神間は、官営鉄道（現JR線）が開通した明治7（1874）年頃から、郊外として大阪、神戸の人々の注目を集めるようになる⁴。北は六甲山、南は瀬戸内海に面した阪神間は、気候も温暖で眺望にも恵まれ、理想的な地形を有していた。さらに、六甲山から流れ出る中小の河川は、夙川、芦屋川といった緑の豊富な河川景観を生み出した⁵。有産階級である財閥系のオーナー経営者、大企業の重役、富裕な商人たちは、別荘や移住地として、この風光明媚な阪神間に早くから着目した⁶。

郊外居住が始まった社会的背景としては、国の近代化の影響が大きい。明治という新時代の幕開けを迎え、新政府は欧米諸国に対抗し、国の近代化・工業化を目指した。国家の経済的基盤を固めるため、富国強兵、殖産興業を政策目標に掲げて、資本主義化を促進した。このような近代化は欧米先進国からの制度や技術の移植によって急速に進められてきたため、結果として悪影響を生むこととなる⁷。特に都市部では、工業主義の台頭により、市民の生活が脅かされる事態が生じた⁸。

大都市・大阪では紡績・繊維工業が著しく発展し「東洋のマンチェスター」と表現されるまでの工業都市になり、人口が急激に増加し、貧民街の増大、疫病や犯罪の蔓延等を引き起こした。また、工場の煤煙、水質汚濁、騒音等の拡大により市民の生活環境は悪化した⁹。その結果、人々は生活環境の改善を求めて郊外居住を始めるようになる。池浦隆一は、『神戸の海運業』の発展と、特に西洋文化による国際化も、大阪の資産家を神戸に近い六甲山麓

の御影・住吉・岡本・芦屋などに居を構えさせることに繋がったものと考えられる」¹⁰との見解を述べている。

郊外住宅地開発が始まるのは、明治後期の頃であると考えられる。有産階級の人々に続き、多くのサラリーマン(給与生活者)層の人々が郊外居住を始めるようになった。やがて、個人レベルで始まった郊外居住も、次第に規模が拡大し、組織によって計画的に行われていく。初期のものとしては、明治38(1905)年に阿部元太郎¹¹が行った住吉村観音林・反高林の住宅地開発が挙げられる。彼は、観音林の土地を借り受け、上水道などのインフラを整備し、住宅を開発して分譲販売を行った¹²。明治40(1907)年頃から居住が開始され、大正2(1913)年の住友家の移住とともに、多数の関西財界人が暮らす高級住宅地として発展した¹³。地域には、欧米の倶楽部をモデルとした観音林倶楽部が設立され、住民の交流を深める場が設けられた¹⁴。また、大阪府立高等医学校長である佐多愛彦(1871-1950)は、明治40(1907)年、芦屋において住宅地開発を行った。彼は、芦屋川沿いの山の手を目を付け、自らの別荘を建設、さらに松風山荘住宅地(芦屋市山手町、東芦屋町)を開いた。これらの他にも、明治40(1907)年から明治45(1912)年にかけて、苦楽園などでの住宅地開発や二楽荘¹⁵(神戸市東灘区・岡本)の建設が行われ、郊外居住を促進した¹⁶。

2. 私鉄の開通と郊外居住の増加

このような郊外居住が広がっていく大きな要因となったのが、交通機関の発達である。明治7(1874)年の官営鉄道の開通に次いで、明治38(1905)年には阪神電気鉄道(以下、阪神電鉄と略す)が開通する。日本初の都市間電気軌道であるこの電車は、大阪出入橋と神戸三宮間を90分で結んだ。先に開通していた官営鉄道の南側(海側)を走ったため、海岸寄りの住宅開発が急激に進展した¹⁷。また、後の阪急電鉄である箕面有馬電気軌道(以下、阪急電鉄と略す)は、明治43(1910)年、梅田-宝塚間に、大正9(1920)年、梅田-神戸間に、それぞれ鉄道を敷設した¹⁸。阪神電鉄が海岸沿いの既存の集落・町村を結んで走ったのに対し、阪急電鉄は、官営鉄道のさらに北側(山側)の、当時はまだ人家の少なかった地域に開通した¹⁹。このようにして、阪神間には、官営鉄道に加え、海岸寄り・山麓を走る2本の私鉄という、計3本の主要幹線が成立した。さらにこの後も、第二国道上を走る国道電車²⁰や、阪急電鉄の西宝線(西宮北口-宝塚間)、甲陽線(夙川-甲陽園間)が開通し、交通網が充実していく²¹。

電鉄会社は、沿線人口を増やして安定した旅客収入を得るため、沿線の住宅地経営を開始するが、「村」へ移り住む郊外生活は、利便性の面で不利な条件を抱えていた。当時発行されていた雑誌『郊外生活』(阪神電鉄による月刊誌)の記事からは、電鉄会社が様々なサービスを行っていたことが見て取れる。同誌の中では、郊外生活の欠点として、夜間交通が不便であること、付近に良医が少ないこと、郵便物集配が遅いこと、物価が高いことなどを挙げている。そして、このような欠点を解消するために、24時半と25時に大阪発の電車を運転していること、沿線に名医が居住し自宅診療に応じていること、西宮に郵便局を新設したこと、沿線の貸家の住人を対象に定期乗車券を8割引にすることなどが述べられている²²。

また、都市部における生活環境の悪化を受け、阪神電鉄、阪急電鉄ともに、健康的に暮らすことのできる場として沿線の郊外住宅地を宣伝した²³。阪神電鉄は、明治41(1908)年

1月に小冊子『市外居住のすすめ』を発行した。この小冊子は、大阪府立高等医学校長の佐多愛彦など医師14名の寄稿を元に作られ、都市部の住民に向けて健康で衛生的な郊外生活を存分にアピールするものであった²⁴。

阪急電鉄も、明治42（1909）年に『如何なる土地を選ぶべきか、如何なる家屋に住むべきか』と題するパンフレットを発行し、阪神電鉄同様、健康的な郊外生活の宣伝を行った²⁵。さらに、大正2（1913）年には、主要沿線地であった箕面宝塚方面の名勝や温泉の案内を掲載した月刊誌『山容水態』を出版した。この雑誌においても、健康に恵まれた郊外での生活を推奨する記事が多く見られる。当時、多くの人々が「健康」に関心を持っており、それは、人々を郊外居住へと誘う絶好のキーワードであったと言えよう²⁶。

以上のように、私鉄の開通に始まり、阪神間は郊外住宅地へと発展を遂げていく。さらに、スポーツ・娯楽施設の建設等も加わり、私鉄沿線の住民は「新しいレジャー空間に結びついた質の高い消費生活」²⁷を送るようになる。これらについては、次章で詳しく述べていきたい。

第2章 郊外生活における余暇活動

1. 電鉄会社によるレジャー開発

前章では、阪神間が郊外都市として成立する過程について考察した。近代化の影響により都市の居住環境は悪化し、人々は「健康」に強い関心を向けるようになる。このような中で、電鉄会社は阪神間における住宅地開発を行い、パンフレットや雑誌等を用いて、健康で衛生的な郊外生活を宣伝した。そして、乗客の更なる増加を促すため、住宅地だけでなく、様々なレジャー施設の開発を行った²⁸。

本章では、このような電鉄会社によるレジャー開発の歴史について考察し、当時の人々が享受していた余暇活動の実態を解明する。

(1) 阪神電鉄

阪神電鉄は、鉄道が開通した明治38（1905）年に、精道村打出に海水浴場を設けた²⁹。当時、海は国民に身近なものとなっていたため、海水浴場は大変人気を博し、同年に南海電気鉄道株式会社によって開発された浜寺の海水浴場と並んで、「北の打出、南の浜寺」と称された³⁰。他にも、当時の阪神沿線には、甲子園浜・敏馬浜・東明浜・芦屋浜など、数々の海水浴場が存在し、休憩所・脱衣場・温浴場・余興場など、場内の設備も充実していた³¹。

明治40（1907）年には、香野蔵治と櫛山慶次郎³²、そして阪神電鉄の出資によって香櫛園という遊園地が誕生した。約1万坪の敷地の中に、音楽堂・動物園・博物館・運動場・ホテル・ウォーターシュートなどが揃った一大レジャーランドであった。運動場では、早稲田大学とシカゴ大学の国際野球が行われた歴史もあったが、香櫛園は5年後の大正2（1912）年に閉園となる。また、香櫛園の開園と同じ明治40（1907）年、関西初の競馬場である鳴尾競馬場も誕生している³³。

1920年代に入ると、阪神電鉄は「川底と山上の開発」に取り組むようになる。現在も阪神間の南北を流れる武庫川では、当時、川底が高かったことから、水害が数多く発生した³⁴。

そこで、治水事業として、横に流れていた支流の枝川、分流の申川が廃川とされ、これによって得られた22万坪を超える大きな敷地は、大正12（1922）年に兵庫県から阪神電鉄に払い下げられた³⁵。阪神電鉄は、そこに児童遊園地・海水浴場・動物園・水族館・公会堂・ホテル・野球場などが集まるレクリエーションセンターを計画する。これが「川底の開発」である。最初に着手されたのは、「東洋一の大球場」構想として大正13（1924）年に完成した甲子園球場³⁶である。続いて、大正15（1926）年に、当時関西で唯一のスポーツセンターであった甲子園総合運動場が誕生する。100面のテニスコートや公会堂を有し、阪神間、関西のスポーツの中心という役割を果たした。さらに、昭和3（1928）年には、甲子園娯楽場（3年後、浜甲子園阪神パークに改称）が誕生する。当時としては珍しい生態展示を取り入れた動物園や、鯨が飼われていた水族館の他にも、プール、スケート場、住宅展示場が備えられ、甲子園一帯は、まさに一大レジャーゾーンとして開発されたのである。また、昭和5（1930）年、宿泊施設として西宮市の武庫川沿いに甲子園ホテル³²が竣工された。設計を担当したのは、帝国ホテルの設計者であるフランク・ロイド・ライト（Frank Lloyd Wright、1867-1959）³⁸の愛弟子・遠藤新（1889-1951）と、帝国ホテルの総支配人・林愛作であった。甲子園ホテルは、「東の帝国ホテル、西の甲子園ホテル」と並び称されるほどの一流ホテルとして高い評価を得るようになり、ジョージ・ハーマン・ルース・ジュニア（George Herman Ruth, Jr.、1895-1948、通称ベーブ・ルース）や三笠宮など、国内外の要人が多数訪れた³⁹。

一方、「山上の開発」とは、六甲山の開発である。神戸や大阪などの都市部から近く、夏は涼しい六甲山は、避暑地としての性格を備えており、山を越えると有馬温泉に至るという観光上恵まれた立地でもある。本格的な観光開発は、昭和2（1927）年、阪神電鉄が六甲山上に約75万坪の土地を取得したことを契機に始まった。しかし、それ以前にも六甲山では一部開発が行われていた。六甲山のレクリエーションの場としての利用は、明治28（1895）年に、アーサー・ヘスケス・グルーム（Arthur Hesketh Groom、1846-1918）⁴⁰が、三国池の湖畔に山荘を建てたことに始まる。明治36（1903）年には、日本初のゴルフ場が建設され、神戸ゴルフ倶楽部が発足した。開港後に神戸にやって来た居留外国人たちは、六甲山でゴルフや登山活動などを行い、彼らと交流のあった日本人たちも、様々なレクリエーションを楽しむようになった⁴¹。そして、阪神電鉄が六甲山上の土地を取得してから5年後の昭和7（1932）年、ケーブルカーが敷設され、合わせてドライブウェイも整備された。運営は、阪神電鉄の傘下にあった六甲越有馬鉄道（大正12（1923）年設立）であり、翌年の昭和8（1933）年には、高山植物園を開設した。さらに阪神電鉄は、昭和9（1934）年に六甲オリエンタルホテル（現在は閉鎖）を開業した⁴²。

(2) 阪急電鉄

阪急電鉄は、明治43（1910）年の梅田－宝塚間の開通と同時に箕面に動物園を作り、廃園後の香櫨園の動物はここへ移された⁴³。さらに、宝塚新温泉、少女歌劇など、それまで武庫川べりの寒村であった宝塚に、老若男女のための様々な娯楽装置が作られていった⁴⁴。

明治44（1911）年、大理石造りの大浴場を設けた宝塚新温泉⁴⁵が開場した。さらに、その隣に翌年、二階建ての洋風建築「パラダイス」がつくられ、中央部には室内プールが設置された。都市の人々が家族連れで気軽に低料金で楽しめるレジャー空間となったが、当時は男女共泳が禁止されていたこと、温水施設が無かったことから、室内プールは利用者が少

なく、この事業は失敗に終わった⁴⁶。

大正2（1913）年、室内プールに次ぐ宝塚新温泉の目玉として、新たに少女唱歌隊が結成された⁴⁷。第1期生として普通の家庭の子女16名（15歳以下）が採用され、6か月後には宝塚少女歌劇団養成会と改められた。さらに、大正7（1918）年には宝塚音楽歌劇学校が設立され、生徒や卒業生によって宝塚少女歌劇団が組織された⁴⁸。昭和2（1927）年、日本最初のレビュー「モン・パリ」を上演し、それを契機に、今日のような高い知名度を持つ宝塚歌劇へと発展したのである⁴⁹。

また、大正15（1926）年には、地元宝塚の実業家・平塚嘉右衛門⁵⁰と共同して宝塚ホテルを開業した⁵¹。同ホテルは、宴会場、公衆食堂、応接室、談話室、球技室、娯楽室、舞踏場、酒場、理髪店、売店、テニスコート、ゴルフリンクスなどを備える最新式の郊外ホテルであった⁵²。これに次いで、昭和5（1930）年に建設されたのが、東洋一のダンスホール・宝塚会館である。当時、阪神間には相次いでダンスホールが建設されていた。この背景として、風紀問題の観点から取締りの対象となった大阪市内でのダンスホールが、昭和2（1927）年より営業禁止の処置を受けたことが挙げられる。交通の便も良く、土地の確保も容易な阪神間には、大阪に代わって多くのダンスホールが開業し、モボ・モガ⁵³たちがこぞって訪れるようになった⁵⁴。

そして、余暇活動において忘れてはならないのが、ショッピングである。昭和4（1929）年、梅田阪急ビルに阪急百貨店が誕生した。大都市の始発駅に百貨店を作り、沿線の客を集めるというターミナル・デパートの先駆けである。その前身は、大正14（1925）年に開業した阪急マーケットで、これは食料品や生活雑貨中心のスーパーマーケットに近い形態であった⁵⁵。

さらに、昭和12（1937）年には、阪急西宮球場（後の阪急西宮スタジアム）⁵⁶が開場した。同じく西宮市に位置する阪神甲子園球場と比較すると13年も遅れての開場であるが、アメリカ・シカゴのリグレー球場を参考にして設計された日本初の二層式スタンドを持ち、野球はもちろん、他の競技や催しなど多目的に使用された⁵⁷。

以上に述べてきた事柄を時系列で示したものが、表1「阪神間におけるレジャー開発の歴史」である。阪神・阪急2つの電鉄会社が、明治後期から昭和初期にかけて、互いに競い合うようにして、次々とレジャー開発を行ってきたことが見て取れる。阪神電鉄は、スポーツ施設、海や山など地の利を活かしたものが多く⁵⁸、阪急電鉄は、エンターテインメント性の高さや、女性をターゲットとしている点が特徴的である⁵⁹。このように、開発志向はそれぞれ異なるものの、旅客収入の確保や自社が所有する不動産の資産価値の向上という営業戦略の一環として実行されたという点において、両者は共通していた⁶⁰。そして、これらの開発は、大正期における大衆消費社会の成立を受け、レジャーの領域においても大衆化が進んだことによって、より多くの人のライフスタイルに影響を与えたものと考えられる。当時開発された施設の中には、時代を経ていくうちに消えてしまったもの、姿を変えてしまったものもある。特に、海水浴場をはじめとする海辺のレジャーは、高度経済成長による埋め立てと海洋汚染の影響を受けた結果、現代の市民にとっては遠い存在となってしまった⁶¹。その一方で、阪神甲子園球場や宝塚歌劇など、現代においても親しまれ続けているものもあり、暮らしに「豊かさ」を加えるレジャー施設・コンテンツ群を形成している。これらは、今日の地域の魅力を高める要因にもなっていると言えよう。

表1 阪神間におけるレジャー開発の歴史

年 代	開発主体	事 柄
明治38 (1905)年	阪神電鉄	阪神電鉄 大阪－神戸開通
	阪神電鉄	打出海水浴場開設
明治40 (1907)年	阪神電鉄	香櫨園開園
	阪神電鉄	香櫨園浜海水浴場開設
明治41 (1908)年	阪神電鉄	鳴尾競馬場開設
明治43 (1910)年	阪急電鉄	阪急電鉄 梅田－宝塚開通
	阪急電鉄	箕面動物園開園
明治44 (1911)年	阪急電鉄	宝塚新温泉開業
明治45 (1912)年	阪急電鉄	宝塚新温泉パラダイス開業
大正2 (1913)年	阪急電鉄	宝塚少女唱歌隊結成、後に宝塚少女歌劇養成会に改称
大正7 (1918)年	阪急電鉄	宝塚音楽歌劇学校設立
大正13 (1924)年	阪神電鉄	阪神甲子園球場開設
大正15 (1926)年	阪神電鉄	甲子園総合運動場開設
昭和3 (1928)年	阪神電鉄	甲子園娯楽場開設(3年後、阪神パークに改称)
昭和4 (1929)年	阪急電鉄	梅田阪急ビルに阪急百貨店開業
昭和5 (1930)年	阪神電鉄	甲子園ホテル開業
	阪急電鉄	宝塚会館(ダンスホール)開館
昭和7 (1932)年	阪神電鉄	六甲山ケーブル、ドライブウェイ整備
昭和8 (1933)年	阪神電鉄	六甲山高山植物園開設
昭和9 (1934)年	阪神電鉄	六甲オリエンタルホテル開業
昭和12 (1937)年	阪急電鉄	阪急西宮球場開設(後の阪急西宮スタジアム)

(「阪神間モダニズム」展実行委員会 編『阪神間モダニズム—六甲山麓に花開いた文化、明治末期－昭和15年の軌跡』淡交社、1997年、240～241頁及び大手前大学総合企画室(公開講座担当)編『歴史と文化の旅』大手前大学、2012年、9頁を参考に筆者作成)

2. 「住」と「遊」の近接

阪神電鉄と阪急電鉄の両沿線には、集客のための娯楽施設として、香櫨園・苦楽園・甲陽園・甲東園・甲子園などが開園されていった⁶²。明治末期から大正期にかけて、香櫨園には遊園地、苦楽園には温泉、甲陽園には映画撮影所(甲陽キネマ撮影所)、甲東園には果樹園、そして甲子園には球場が設けられた⁶³。今日においては、これらの施設の多くが閉じられてはいるものの、住宅街の名として残り、良好なイメージを保ち続けている⁶⁴。

阪神間の東部に位置する西宮市には、このような「園」のつく地名が集中している。甲東園、香櫨園、苦楽園、甲陽園、甲子園、甲風園、昭和園⁶⁵という7つを合わせて「西宮七園」と呼ばれている。フランス文学者・評論家であり、京都大学名誉教授の多田道太郎(1924-2007)は、これらの地名の由来について、ハーワードの『田園都市』構想の影響を指摘する⁶⁶。

明治31(1898)年、イギリスのエベネザー・ハーワード(Ebenezer Howard、1850-1928)は、『明日一真の改革にいたる平和な道』と題した著書を刊行した。これは、大正9(1920)年に『明日の田園都市(Garden City of Tomorrow)』と改訂され、再度出版された。彼が唱えた田園都市とは、既存の大都市から離れており、豊かな田園に囲まれた、小さいながらも独立した都市機能を持つものである。その都市で働き、生活するという、職住近接の形態が理想とされた。加えて、土地の管理・運営は公的機関によってなされ、個人の所有物として売

買することを禁じていた⁶⁷。

日本においても、明治40（1907）年12月、内務省地方局の有志が『田園都市』⁶⁸という書籍を出版するなど、「田園都市」をコンセプトにした住宅地開発が行われた。そこでは、都市生活の利便性と、農村の美しい自然環境という、両者の利点の合体が目指されたが、個人の土地の所有権を認めている点など、ハウードの本来の構想が生かされなかった部分も見受けられる⁶⁹。

日本型田園都市を構想した都市計画家・大家霊城（1890-1934）⁷⁰は、ハウードの提唱をアレンジし、遊戯場や広場、園芸場などの散在する「花苑都市」構想を提示した。この構想は、ハウードによる職住接近型とは異なり、「職」と「住」を分離しつつ、さらに「遊」を付け加えた、独特な「『住』と『遊』が近接した楽園のイメージ」⁷¹である。このような日本型のガーデン・シティは、甲子園地区の開発計画などに多大な影響を与えた⁷²。

阪神間には、先述した阪神電鉄・阪急電鉄のレジャー開発によって、「住」空間に近接して、豊富な「遊」の選択肢が用意された。六甲山や海水浴場でのアウトドアレジャーや甲子園球場でのスポーツ観戦、宝塚歌劇の鑑賞や宝塚ホテルでの会食など、多様な余暇活動を通して、人々は豊かな郊外生活を享受していたものと考えられる。

次章では、阪神間における文化的特徴について、消費活動と教育の2つの観点から述べ、豊かな郊外生活が展開されてきた背景について考察を試みる。

第3章 阪神間の文化的特徴

1. 消費活動にみる「私」の文化

これまでにみてきたように、阪神間の地には余暇活動の選択肢が豊富に用意され、市民に私生活の充実をもたらした。そして、この「私」というキーワードが、阪神間の文化の特徴を示していると考えられる。

私的な住宅地として発展した阪神間では、「公」の文化よりも「私」の文化が主体となった。例えば、官営鉄道よりも阪急・阪神といった私鉄の駅前の方が栄え、教育の面においても私学⁷³の創設が相次いだ。さらに、個人経営の私立美術館⁷⁴が開設され、文化施設の充実が図られていった。阪神間において、文化の主導権を握っていたのは「私」であったと言える⁷⁵。

当時「公」の世界の主体を担っていた男性は、日中は阪神間を離れ、大阪や神戸の会社や商店に勤めていた。彼らにとって、自宅のある阪神間は夜になってから寛ぐ場に過ぎなかったのに対し、一方の女性は、日中を阪神間で過ごし、地域文化の担い手となった。ここで言う女性とは、自己啓発に励むキャリアウーマンではなく、時間的にも経済的にも生活に余裕のある有閑夫人のことである⁷⁶。彼女たちは、自宅の客間に同好の人々を招き、ゆるやかな交流を楽しんだ。以上のことから、阪神間におけるモダニズム文化は、「公」よりも「私」の色が強いことが分かる。

これに対し、首都である以上、東京のモダニズムは「公」の性格が強く、「男子たる者いかに生くべきか」といった価値観が強調された。東京では、武家の都・江戸であった名残から、ホンネよりもタテマエを重視する風土が近代以降も残存したと考えられる⁷⁷。

他方、近代以前から、商都・大阪ではタテマエよりホンネを重んじる傾向があった。商売において、ストレートに人の心を掴むには、生活感覚や身体感覚といったセンスが求められる。そこでは、関東における「男子たる者いかに生くべきか」といった観念的なものよりも、大衆のホンネが重要な意味を持つと考えられる⁷⁸。

河内厚郎は、個人の消費生活について

生産的な活動においては、人々は意識的に協力し合って励まざるをえない。そこでは能動的で意識的なモラルを説く必要がある。しかし個人の消費生活には人間のホンネが色濃く現れる。自分が誰にも干渉されず自分のカネを自由に使っていいとなれば、本心に欲しいものを求めるのが人情というものであろう。心から楽しいもの、美しいもの、快適なものを求めるのが自然の成り行きであり、そこに「やせ我慢」の美学は必要ない⁷⁹。

と述べた上で、これを美的消費の文化と名付けた。そして、このようにして私生活を楽しみ、充実させることは、貴族や町人によって近代以前から開発されてきた関西の文化的伝統であると結論付けた⁸⁰。

阪神間の文豪・谷崎潤一郎(1886-1965)の小説に、阪神沿線の打出界隈を舞台に描いた『猫と庄造と二人のをんな』がある。この作品は、擬人化された猫ではなく、猫そのものが生活文化の主演として登場する最初の近代小説として、昭和12(1937)年に出版された。猫という生き物は、生産的な活動を一切行わないことから、「私生活」「消費生活」の象徴的存在であるとされている。このような小説が描かれ始めたということはすなわち、一般市民が私生活・消費生活を享受できるようになったことを意味すると考えられる⁸¹。

人間というのは、衣食足りてこそ心も豊かになり、「個人」としての生活を築くことができるようになる。このような平凡な事実、戦前の段階から向き合ってきたのが阪神間の市民文化であった⁸²。豊かな郊外生活は、個人のライフスタイルを重んじるという価値観に支えられ、展開されてきたと考えられる。

2. 教育にみる美意識の重視

阪神間には「私」を重視する文化的傾向があり、それが、私生活の充実した豊かな郊外生活に繋がっていることはすでに述べた。ここで強調しておきたいのが、阪神間において展開されてきた豊かな郊外生活とは、経済力だけを意味する「豊かさ」だけではないという点である。高価な物に囲まれた暮らしや、沿線の娯楽施設での豪遊といったイメージではなく、どこか落ち着いていて堅実な生活が展開されてきたのではないかと考える。ここでは、阪神間で実施されていた教育の事例を挙げて、人間の価値基準やモラルといった内面に迫り、豊かな郊外生活が展開されてきた背景について考察を加える。

人間の価値基準は、「善悪」と「美醜」に大別できるのではないだろうか。善悪とは、意識的な良し悪しの区別であり、美醜とは、個人の感性で無意識的に判断される⁸³。

近代日本の公教育においては、善悪の規範が重視された。明治時代に入ると、国家の整備や社会の近代化の達成が急がれ、外側から善のモラルを説くばかりの教育が実施された。一方で、個人の内なる美意識を育てる情操教育は疎かになった⁸⁴。例えば、修身という教科では、天皇制国家に忠義を尽くす臣民の育成が目指された。加藤瑞穂は、修身の授業に

ついて、「教育勅語が唱えられ、忠義や勤勉、孝行を称える訓話が読まれたが、それらは多くの場合、知識として各徳目を教えるいわゆる注入式の教授であった」⁸⁵と述べている。

このような明治時代以降の学習形態を強く否定し、「美」を求めた教育を推進したのが、「芦屋児童の村小学校」である。この学校は、精道村（現芦屋市）における初の私立小学校として、大正15（1926）年に創設された。設立者の1人として名を連ねた桜井祐男（1887-1952）が中心となって、生徒の個性や自主性を尊重した自由教育を追求した。この学校の突出した特徴は、時間割が一切なく、時間や場所、教材を各自自由に選択できるという点であった⁸⁶。

桜井がこのような教育理念を掲げた根拠については、加藤の研究に詳しい。それによれば、桜井の教育理念を根底から支えていたのは、彼独自の「美」と「芸術」の概念であったという。彼の言う「美」とは、「自己と他者が完全に満足のゆく状態」、「自他両者共存」の状態であり、「芸術」とは、それらを獲得する「技巧的配慮」、「創造努力」を指す⁸⁷。

桜井は、美意識の覚醒こそが、修身という教科の目的であるとし、従来の教え方に異論を唱えた。彼は、美意識、すなわち「『自他両者共存』の状態を『美』とを感じるような意識」⁸⁸が各人の中に芽生えるよう働きかけることによって、外からモラルを与えられずとも、自己を律することのできる人物の育成を試みたのではないだろうか。従来の修身の理念が「善悪」の規範を重視していたのに対し、桜井は個人による自由な「美醜」の判断を尊重した⁸⁹。このような桜井の思想は、成熟した社会におけるモラルの形成と密接に関わっていると考えられる。社会の円満を維持するためには、「自他両者共存」の状態をいかに作り出すかが求められている。従って、桜井が重視した美意識の覚醒とは、各人が自らの判断で行動を律することによって社会の円満が達成されるという、強制力に頼らない高い次元でのモラルを意味していると言えるであろう。そして、豊かな郊外生活は、このような成熟した社会においてこそ、実現されたと考えられる。

結論（おわりに）

これまで論じてきたように、郊外住宅地としての阪神間の誕生は、近隣都市である大阪や神戸の顕著な都市化・産業化が契機となった。明治時代の幕開けとともに進められた国の近代化・工業化の流れの中で、特に大阪では住環境が悪化し、「健康」を求めて阪神間の地へ郊外居住を始める人々が増加した。これまで田園地帯であった場所に、住宅や教育施設が整備され、スポーツや娯楽のための施設も数多く設けられた。このような阪神間の都市的・文化的な発展には、私鉄の資本力によるものが非常に大きい。竹村民郎は、著書の中で「私鉄城下町」という表現を用い、市民が労働や生活、レジャーの領域等で巨大な私鉄資本のコントロールを受けていると述べている⁹⁰。

本稿のねらいは、「阪神間モダニズム」と呼ばれる時代の市民の余暇活動に焦点を当てて、郊外都市の豊かな暮らしと生活美学が育まれてきた背景について明らかにし、この地域の魅力を再確認することであった。先述したように、生活美学とは「日常生活に潤いや楽しみを取り入れる作法・術」であり、暮らしに「豊かさ」を加える沿線開発がこれに大きく影響していることは明らかである。第2章で論じてきたように、阪神・阪急の2つの電鉄会社が行ったレジャー開発によって、阪神間は「住」と「遊」が近接したユートピアとして発展を遂げた。

レジャー施設の中には、「関西初」「日本初」「東洋一」など、目新しさや壮大さを売りにしたものが多くみられるのが特徴的である。生活を楽しむための多様な「遊」の選択肢は、生活美学の形成と密接に関わり、私生活の充実をもたらしたと考えられる。

第3章では、「私」「個人」を重視する阪神間の文化的特徴について述べた。ホンネを重視する商都・大阪の伝統的な土壌が息づく阪神間では、市民は「やせ我慢」に美学を見出すのではなく、消費活動に貪欲であった。積極的に豊かさを受容し、個人としての生活を充実させる美的消費の文化が育まれた。このような「私生活主義」の広がりには、サラリーマン(給与生活者)層の急増により、より多くの人々が経済的なゆとりを持ち始めたことに起因していると考えられる。さらに、教育においても、美意識、すなわち個人の自由な判断を尊重する私立小学校が芦屋に誕生した。ここでは、「美」と「善」の両立—何かを心から「正しい」と信じる時、同時に「美しい」という実感を伴い、また心の底から「美しい」と実感するとき、そこには「正しい」という思いを伴う⁹¹—が理想とされ、高い次元でのモラルの形成が目指されたと考えられる。このような思想からは、高尚な精神や社会の成熟度を感じ取ることができるが、やはりこれらも、人々が経済的なゆとりを持ち始めたことと、無関係とは言えないだろう。以上のことから、阪神間において豊かな暮らしが営まれ、生活美学が育まれてきた背景には、電鉄会社による積極的な沿線開発に加え、経済的環境と文化的環境とが大きく作用していると考えられる。

今日の阪神間においても、「阪神間モダニズム」の時代に育まれたライフスタイルや文化が息づき、地域の特徴・魅力となっているのではないだろうか。阪神間の人々は、今なお生活美学を持ち、「私生活の楽しみ方」を日々実践していると考ええる。自然環境、交通利便性共に恵まれ、「住」と「遊」が近接したユートピアとして発展を遂げた阪神間は、現在においても、人々が生き生きと暮らすことのできる条件・環境が整った理想郷であり続けると言える。

注

- ¹ 平成22(2010)年～27(2015)年にかけての人口増減数(増加率)は、兵庫県宝塚市2,403人(2.6%)、西宮市8,317人(4.1%)、芦屋市2,128人(5.4%)、神戸市東灘区3,226人(3.4%)、神戸市灘区2,229人(3.4%)というように、増加傾向にある(総務省統計局「平成27年国勢調査」、人口等基本集計、都道府県結果28兵庫県、2016年10月26日公表：http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?_toGL08020103_&tclassID=000001077470&cycleCode=0&requestSender=estat (2016年12月31日取得))。
- ² 神谷恵「阪神間モダニズムにおける地域文化の考察—地域創生との関わりを通じて—」(『奈良県立大学研究報告』第7号、2015年、所収、58頁)
- ³ 特定非営利活動法人芦屋ミュージアム・マネジメント 阪神間モダニズム調査隊 編『阪神間モダニズム調査隊報告書2013』特定非営利活動法人 芦屋ミュージアム・マネジメント、2014年、11～12頁
- ⁴ 阪急沿線都市研究会 編『ライフスタイルと都市文化 阪神間モダニズムの光と影』東方出版、1994年、129頁
- ⁵ 「阪神間モダニズム」展実行委員会 編『阪神間モダニズム—六甲山麓に花開いた文化、明

- 治末期－昭和15年の軌跡』、淡交社、1997年、27頁
- ⁶ 特定非営利活動法人 芦屋ミュージアム・マネジメント 阪神間モダニズム調査隊 編、前掲書、10頁
- ⁷ 「阪神間モダニズム」展実行委員会 編、前掲書、26頁
- ⁸ 竹村民郎『阪神間モダニズム再考』三元社、2012年、122頁
- ⁹ 同上書、122～123頁
- ¹⁰ 特定非営利活動法人 芦屋ミュージアム・マネジメント 阪神間モダニズム調査隊 編、前掲書、10～11頁
- ¹¹ 阿部元太郎は、阪神間における住宅地開発の先駆者であり、後に日本住宅株式会社取締役社長として、雲雀丘（宝塚市）など阪神間の代表的な住宅地を次々と手がけた（「阪神間モダニズム」展実行委員会 編、前掲書、43頁）。
- ¹² 特定非営利活動法人 芦屋ミュージアム・マネジメント 阪神間モダニズム調査隊 編、前掲書、11頁
- ¹³ 阪急沿線都市研究会 編、前掲書、130頁
- ¹⁴ 明治45（1912）年に設立された観音林倶楽部では、政治談義、村政改革などの議論が活発に論じられた（特定非営利活動法人 芦屋ミュージアム・マネジメント 阪神間モダニズム調査隊 編、前掲書、11頁）。
- ¹⁵ 二楽荘は、六甲山の山麓に、明治42（1909）年西本願寺第22宗主・大谷光瑞氏が建てた別邸である（龍谷大学龍谷ミュージアム公式HP：<http://museum.ryukoku.ac.jp/exhibition/sp201410.html>（2016年11月30日取得））。
- ¹⁶ 阪急沿線都市研究会 編、前掲書、130～131頁
- ¹⁷ 「阪神間モダニズム」展実行委員会 編、前掲書、27～28頁
- ¹⁸ 阪急沿線都市研究会 編、前掲書、131頁
- ¹⁹ 神谷恵、前掲論文、60頁
- ²⁰ 国道電車は、昭和2（1927）年に開通した、大阪－神戸間を結ぶ路面電車であり、昭和49（1974）年に廃線となった（「阪神間モダニズム」展実行委員会 編、前掲書、28頁）。
- ²¹ 同上書、28頁
- ²² 阪急沿線都市研究会 編、前掲書、131～132頁
- ²³ 同上書、133頁
- ²⁴ 辻川敦・大国正美『神戸～尼崎 海辺の歴史 古代から近現代まで』神戸新聞総合出版センター、2012年、244～249頁
- ²⁵ 阪急電鉄によるパンフレット『如何なる土地を選ぶべきか、如何なる家屋に住むべきか』には、「美しき水の都は昔の夢と消えて、空暗き煙の都に住む不幸なる我が大阪市民諸君よ！……」「出産率十人に対し死亡率十一人強にあたる大阪市民の衛生状態に注意する諸君は……」といった誘い文句が並んでいる（阪急沿線都市研究会 編、前掲書、134頁）。
- ²⁶ 同上書、134～135頁
- ²⁷ 竹村民郎、前掲書、146頁
- ²⁸ 阪急沿線都市研究会 編、前掲書、135頁
- ²⁹ 辻川敦・大国正美、前掲書、259頁
- ³⁰ 大手前大学総合企画室（公開講座担当）編『歴史と文化の旅』大手前大学、2012年、8～10頁

- ³¹ 辻川敦・大国正美、前掲書、260頁
- ³² 砂糖商・香野蔵治と株仲間買人・榎山慶次郎は、夙川の西に広がる約1万坪の丘陵地を借り受け、遊園地を建設した。創業者である彼らの姓から1文字ずつ取り、香榎園と名付けられた(「阪神間モダニズム」展実行委員会 編、前掲書、222頁)。
- ³³ 大手前大学総合企画室(公開講座担当)編、前掲書、10～13頁
- ³⁴ 同上書、16頁
- ³⁵ 「阪神間モダニズム」展実行委員会 編、前掲書、220頁
- ³⁶ 阪神甲子園球場は、その年の干支が甲子だったことから甲子園という名が付けられた(河内厚郎『阪神間近代文学論 柔らかい個人主義の系譜』関西学院大学出版会、2015年、72頁)。
- ³⁷ 甲子園ホテルは、海軍病院・米軍の将校宿舎を経て、昭和40(1965)年、武庫川学院が譲り受け、現在は教育施設「甲子園会館」として利用されている(武庫川女子大学甲子園会館公式HP：<http://www.mukogawa-u.ac.jp/~kkcampus/rekishi/index.html> (2016年12月1日取得))。
- ³⁸ フランク・ロイド・ライト(Frank Lloyd Wright、1867-1959)は、アメリカ出身の建築家であり、帝国ホテルの他にも、芦屋川左岸の丘上に位置するヨドコウ迎賓館(旧山邑邸)を設計した(「阪神間モダニズム」展実行委員会 編、前掲書、86頁)。
- ³⁹ 大手前大学総合企画室(公開講座担当)編、前掲書、16～24頁
- ⁴⁰ アーサー・ヘスケス・グルーム(Arthur Hesketh Groom、1846-1918)は、イギリス出身の実業家で、神戸の外国人居留地で貿易商を営んだ人物である(六甲山歩HP：<http://www.city.kobe.lg.jp/information/public/online/rokkosanpo/history/index.html> (2016年12月1日取得))。
- ⁴¹ 同上Webサイト
- ⁴² 大手前大学総合企画室(公開講座担当)編、前掲書、19～20頁
- ⁴³ 同上書、14頁
- ⁴⁴ 「阪神間モダニズム」展実行委員会 編、前掲書、211頁
- ⁴⁵ 宝塚新温泉は、昭和35(1960)年に改称し、「宝塚ファミリーランド」となった(橋本雅夫『阪急電車 青春物語』草思社、1996年、47頁)。
- ⁴⁶ 竹村民郎、前掲書、178～179頁
- ⁴⁷ 新たに遊覧客を吸収する目的で、当時大阪三越の人気者であった少年唱歌隊を参考に、少女唱歌隊が結成された(同上書、179頁)。
- ⁴⁸ 同上書、179～180頁
- ⁴⁹ 橋本雅夫、前掲書、47頁
- ⁵⁰ 平塚嘉右衛門は、大正8(1919)年に、平塚土地経営所を設立して本格的な宅地開発と土地の分譲に乗り出し、宝塚ホテルや六甲山ホテルなどの経営にも参加した(宝塚温泉HP：<http://www.h-wakamizu.com/takarazuka/story/page04.html> (2016年12月7日取得))。
- ⁵¹ 「阪神間モダニズム」展実行委員会 編、前掲書、211頁
- ⁵² 同上書、115頁
- ⁵³ モボ・モガとは、「モダン・ボーイ」「モダン・ガール」の略であり、1920年代、西洋文化の影響を受け、時代性や流行を意識した進歩主義的傾向をもつ男女のことをこう呼んだ(戸田清子「阪神間モダニズムの形成と地域文化の創造」(奈良県立大学『地域創造学研究

- Ⅱ 特集：住宅都市の創造—阪神間を事例として—』第19巻第4号、2009年、所収))。
- ⁵⁴ 「阪神間モダニズム」展実行委員会 編、前掲書、211～212頁
- ⁵⁵ 橋本雅夫、前掲書、47～48頁
- ⁵⁶ 阪急西宮スタジアムは、平成14（2002）年に閉鎖された後、跡地の再開発が行われ、現在は大型ショッピングセンター「阪急西宮ガーデンズ」となっている。
- ⁵⁷ 橋本雅夫、前掲書、50頁
- ⁵⁸ 阪急沿線都市研究会 編、前掲書、136頁
- ⁵⁹ 大手前大学総合企画室（公開講座担当）編、前掲書、14頁
- ⁶⁰ 「阪神間モダニズム」展実行委員会 編、前掲書、222頁
- ⁶¹ 辻川敦・大国正美、前掲書、262頁
- ⁶² 河内厚郎、前掲書、72頁
- ⁶³ 多田道太郎・河内厚郎・毎日新聞社未来探検隊 編『阪神観—「間」の文化快楽』東方出版、1993年、20頁
- ⁶⁴ 河内厚郎、前掲書、72頁
- ⁶⁵ 西宮七園のうち、甲風園と昭和園は純粋な住宅地として開発された。
- ⁶⁶ 多田道太郎・河内厚郎・毎日新聞社未来探検隊 編、前掲書、20頁
- ⁶⁷ 「阪神間モダニズム」展実行委員会 編、前掲書、49頁
- ⁶⁸ 内務省地方局の有志による『田園都市』は、健康で衛生的な田園都市の理想像を具体的に示した啓蒙書で、たちまち版を重ね、多方面に大きな影響を与えた（辻川敦・大国正美、前掲書、245頁）。
- ⁶⁹ 「阪神間モダニズム」展実行委員会 編、前掲書、49頁
- ⁷⁰ 大家霊城は、大正4年に東京帝国大学農科大学農学科を卒業し、明治神宮造営局に入ったのち、大阪府技師に転じた人物である（同上書、54頁）。
- ⁷¹ 多田道太郎・河内厚郎・毎日新聞社未来探検隊 編、前掲書、20頁
- ⁷² 同上書、20頁
- ⁷³ 阪神間における私学には、キリスト系のミッション・スクールとして神戸女学院、関西学院が、そして、阪神間在住の実業家たちによって設立されたものとして報徳学園、甲南・甲陽・灘・甲南女子などが挙げられる（「阪神間モダニズム」展実行委員会 編、前掲書、153頁）。
- ⁷⁴ 本邦初の私立美術館となる三田博物館は阪神北郊の三田の地に帝国博物館総長を務めた九鬼隆一（1852-1931）によってつくられている（河内厚郎、前掲書、128頁）。その他、阪神間には、西宮市大谷記念美術館、白鶴美術館、香雪美術館など多くの私立美術館が開設された。
- ⁷⁵ 河内厚郎『阪神学事始』神戸新聞総合出版センター、1994年、135頁
- ⁷⁶ 同上書、135～136頁
- ⁷⁷ 河内厚郎、前掲書（注36に同じ）、130頁
- ⁷⁸ 同上書、129頁
- ⁷⁹ 同上
- ⁸⁰ 河内厚郎、前掲書（注76に同じ）、138頁
- ⁸¹ 同上書、143～144頁
- ⁸² 同上書、144～145頁

- ⁸³ 同上書、138～139頁
- ⁸⁴ 同上書、138～140頁
- ⁸⁵ 「阪神間モダニズム」展実行委員会 編、前掲書、146～147頁
- ⁸⁶ 「芦屋児童の村小学校」は、まず大正14(1925)年に、武庫郡御影町1344に私立御影児童の村小学校として生まれ、翌年、精道村芦屋字前田54へ移転したもので、その2年前に設立された「池袋児童の村小学校」の姉妹校であった(同上書、145～146頁)。
- ⁸⁷ 同上書、146頁
- ⁸⁸ 同上書、147頁
- ⁸⁹ 同上
- ⁹⁰ 竹村民郎、前掲書、146頁
- ⁹¹ 河内厚郎、前掲書(注76に同じ)、142頁

参考文献

—著書—

- 「阪神間モダニズム」展実行委員会 編『阪神間モダニズム—六甲山麓に花開いた文化、明治末期—昭和15年の軌跡』淡交社、1997年
- 上野又勇『阪神電車 街と駅の1世紀』彩流社、2012年
- 大手前大学総合企画室(公開講座担当)編『歴史と文化の旅』大手前大学、2012年
- 河内厚郎『阪神間近代文学論 柔らかい個人主義の系譜』関西学院大学出版会、2015年
- 河内厚郎『阪神学事始』神戸新聞総合出版センター、1994年
- 川本皓嗣・松村昌家『阪神文化論』思文閣出版、2008年
- 財団法人あまがさき未来協会 編『KANSAI ニューウエストの台頭—摂津の国と阪神間文化』関西書院、1993年
- 竹村民郎『阪神間モダニズム再考』三元社、2012年
- 多田道太郎・河内厚郎・毎日新聞社未来探検隊 編『阪神観—「間」の文化快楽』東方出版、1993年
- 谷崎潤一郎『細雪(上)』新潮文庫、1955年
- 谷崎潤一郎『細雪(中)』新潮文庫、1955年
- 谷崎潤一郎『細雪(下)』新潮文庫、1955年
- 辻川敦・大国正美『神戸～尼崎 海辺の歴史 古代から近現代まで』神戸新聞総合出版センター、2012年
- 特定非営利活動法人 芦屋ミュージアム・マネジメント 阪神間モダニズム調査隊 編『阪神間モダニズム調査隊報告書2013』特定非営利活動法人 芦屋ミュージアム・マネジメント、2014年
- 鳴尾村誌編纂委員会 編『鳴尾村誌1889-1951』西宮市鳴尾区有財産管理委員会、2005年
- 橋本雅夫『阪急電車 青春物語』草思社、1996年
- 阪急沿線都市研究会 編『ライフスタイルと都市文化 阪神間モダニズムの光と影』東方出版、1994年
- 阪神沿線の文化110年展実行委員会 編『阪神沿線 まちと文化の110年』神戸新聞総合出版セ

ンター、2015年

阪神文化交遊会 編『阪神間からの贈りもの 人と文化の徒然抄』神戸新聞総合出版センター、2013年

三宅正弘『甲子園ホテル物語 西の帝国ホテルとフランク・ロイド・ライト』東方出版、2009年

—論文—

神谷恵「阪神間モダニズムにおける地域文化の考察—地域創生との関わりを通じて—」
〔奈良県立大学研究報告〕第7号、2015年、所収）

戸田清子「阪神間モダニズムの形成と地域文化の創造」（奈良県立大学『地域創造学研究Ⅱ
特集：住宅都市の創造—阪神間を事例として—』第19巻第4号、2009年、所収）

—Webサイト—

神戸っ子アーカイブ公式HP：

<http://kobe-kobecco.com/archives/30796>（2016年11月30日取得）

宝塚温泉HP：

<http://www.h-wakamizu.com/takarazuka/story/page04.html>（2016年12月7日取得）

武庫川女子大学甲子園会館公式HP：

<http://www.mukogawa-u.ac.jp/~kkcampus/rekishi/index.html>（2016年12月1日取得）

龍谷大学龍谷ミュージアム公式HP：

<http://museum.ryukoku.ac.jp/exhibition/sp201410.html>（2016年11月30日取得）

六甲山歩HP：

<http://www.city.kobe.lg.jp/information/public/online/rokkosanpo/history/index.html>
（2016年12月1日取得）

—統計調査—

総務省統計局「平成27年国勢調査」、人口等基本集計、都道府県結果28兵庫県、2016年10月26日公表：

http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?_toGL08020103_&tclassID=000001077470&cycleCode=0&requestSender=estat（2016年12月31日取得）